

収入向上への強い期待を原動力として  
—ダグマ山系、先住民族の村の緑化活動—

＊ タクネル村ティヌオスでの植林体験 ＊

昨年、約8年ぶりにスタディー・ツアーの企画が出た時、アグロフォレストリー事業担当者も同行するので、皆で苗木の移植作業に参加できればとの希望を現地に伝えました。タクネル村ティヌオスで、その準備を進めていてくれました。住民や、念のため警備にあたった軍の兵士が、スコップで穴を掘り、私たちは手渡された苗木を一本ずつ植えただけで、作業というより儀式のような雰囲気でした。それでもこの一本が、数年後には、アラー川源流域の土壌流出を止める一助になると、植えた苗木への愛着を感じました。

成果が出るまでに時間がかかるアグロフォレストリー事業が成功するには、「貧しいからこそ苗木を植える。近い将来の収入向上に賭けよう」と、定期的に集まり、励まし合う仲間が必要です。私たちも、たった一本ですが、自分の植えた苗木の成長を見届けるためにも、受益者組合の集会で、住民たちを励ますためにも、またティヌオスを訪ねたいと思います。

(ティヌオスの事業は地球環境基金により実施しています)

以下は、今年度、同じレイクセブ町で実施している2件のアグロフォレストリー事業モニター報告です。

＊ ラムダラグ村：最初に、2年目対象のラムカニダン地区を訪ねました。ナブルやナラなどの在来種やコーヒー、ゴムなどの苗木が、合計30haに移植が終わっていました。今のところ枯死した苗はないようですが、日当たりの悪い土地もあり、無事成長していくか少し気になりました。



1年目の対象地区タブロも訪ねました。ここは移植が遅れたゴム苗木が育っているか、心配でしたが、しっかり伸びていて1mを超えていました。

(緑の募金公募事業)

写真：担当藤川と住民

＊ タシマン村：10月に事業開始のシエテ地区ではすでに受益者20名が決まり、各世帯1haの植栽予定地も確定していました。その一人は、傍らの息子を紹介して「ハイスクールに通わせていたが、学校が遠く、乗合バイク代が高くて中退させた。事業の成果に期待している」と話しました。(三井物産環境基金助成)

ティナラク織

— 品質向上を目指して —

レイクセブ町には、伝統工芸連盟があり、ティナラク織、高機織、ビーズ製品、真鍮細工の生産に関わっている約千人の女性が所属する16団体が加盟しています。COWHEDのマネジャー・ジェナリンは理事の一人です。昨年ジェナリンが申請をして、国の「草の根支援」の助成金を得ることができ、技能向上のための各種講習を行ったそうです。

ティナラク織の講習は、2日間3人の講師を迎え、技術のみならず、植物染料を用いるなど、伝統を守ることが強調されたそうです。

講師の一人は、1998年にティナラク織で人間国宝に認定されたラン・ドゥライでした。昨年12月ラン・ドゥライの工房を訪ねました。認定されて嬉しかったのは、その賞金で工房を作り、若い人に伝統を伝えていけるということだったそうです。



人間国宝

ラン・ドゥライ  
さん

お孫さんを含むお弟子さんは15名いるそうで、訪ねた時は、工房内に6名が、熱心に、織りや、括りをしていました。90歳代のラン・ドゥライは、今は自分で織ることはしませんが、ここで織られる織は、すべてラン・ドゥライのデザインで、布の端に名前が織り込んであります。ラン・ドゥライは12歳から織り始め、デザインはすべて自分が夢で見たものとの事。織はどれも、細かい模様がきちんと揃っていて、品質の良さは一目瞭然です。値段は、COWHEDで買う3倍以上はしました。それでも経済的には報われていません。今の工房が手狭で、もう一棟工房があればと、COWHEDも助成機関からの助成金が得られるよう尽力しましたが、種々の理由で実現しませんでした。



ラン・ドゥライさんの  
工房。織のすべての  
工程はこの2階で  
行われています。

お弟子さんたちがラン・ドゥライの教えを忠実に守り、上質のティナラク織を織り続けてくれることを願っています。